

「雑がみ回収袋」で分別に挑戦

シリーズ「ごみ減量をいかにして成功させるか」⑦

分別の意識が高まり、燃やしやすいごみ袋の小サイズとプラスチック専用袋の購入が増えています。それ以外の雑紙の分別は、紙袋一つで簡単にできます。今回は、雑紙の分別に役立つ紙袋を紹介します。

【問】市廃棄物対策課 (☎72・1334)

分別に役立つ「雑がみ回収袋」を無料配布中

市は、家庭から出る雑紙の分別を推進するため、「雑がみ回収袋」を作成。市内の小中学校の児童や生徒に配布し、環境教育を実施しています。

この回収袋は、市役所各庁舎1階の窓口や各コミュニティセンターでも無料配布中。回収袋を使って、雑紙の分別に挑戦してみてください。

●「雑がみ回収袋」のおすすめポイント

- ① A4サイズの紙が折らずに入る大きさ
- ② 回収袋の側面には、雑紙の出し方や分別方法などを記載し、雑紙の分別をお手伝い
- ③ 破れにくい強い紙で作成

■市内の可燃ごみの量



有明ひまわりセンターで火入れ式

10月14日、新ごみ焼却施設「有明ひまわりセンター」で火入れ式がありました。これは、施設で初めて焼却炉に火を付けるときに、運転中の安全を願って行われるもの。有明生活環境施設組合組合長の金子市長をはじめ、建設工事を請け負った株式会社タクマの南條博昭社長など関係者約40人が出席。式典では神事後、金子市長と、みやま市の松嶋市長、南條社長が炉に点火するスイッチを押しました。点火後、金子市長が「地域環境に最大限配慮した運営をしていく」と挨拶。同施設は、11月1日から試運転を開始します。可燃ごみの直接搬入先が変わるので注意してください。



点火後、炉内の様子をモニターで確認する金子市長(中央)ら



▲無料で配布している「雑がみ回収袋」

よくあるお問い合わせ

Q 瓶はふたを付けたまま捨ててもいいですか？

A 瓶を出すときは、必ずふたを分別してください。ほとんどのふたがプラスチックか金属のどちらかに分別できます。



柳川とおき歴史の話—立花宗茂外伝—第3回



立花宗茂の剣術の師 タイ捨流開祖 丸目蔵人佐

柳河藩の祖・立花宗茂には、剣術の師がいました。文禄5(1596)年10月、宗茂は丸目蔵人佐長恵から、タイ捨流剣術の免許、印可状を授与されています。ちょうど二度目の朝鮮出兵が行われる時期にあたり、このとき宗茂は30歳でした。おそらく幼少の頃から、この剣法を学んでいたと思われる。

偶然にも、筆者もこのタイ捨流剣術を、13代宗家・山北竹任先生のもとで修行し、42歳のときに免許をいただきました。

タイ捨流の創始者・丸目蔵人佐は、天文9(1540)年に現在の熊本県人吉市に生まれており、幼少期から幾多の武術を学び、20歳で上洛しました。

やがて、新陰流の上泉伊勢守信綱入門。柳生宗厳ら高弟と「四天王」と称されるまで、数年しかかりませんでした。

永禄年間(1558~1570

年)には、13代将軍・足利義輝の兵法上覧に預かり、信綱と共に將軍から感状をもらっています。

蔵人佐が師の信綱から新陰流の印可を得たのは、永禄10年のこと。故郷へ錦を飾って、人吉に戻った蔵人佐は、領主相良家中の子弟への、兵法指南をおこない、門人を育てました。

ところが蔵人佐は、永禄12年正月、肥薩国境に近い大口城で島津義久に敗戦。主君義陽の不興をかい、出仕を止められてしまいます。

その後しばらく、蔵人佐の消息は伝わっていません。

筆者は「この空白期間、蔵人佐は高橋紹運、戸次道雪のもとで宗茂を鍛えていたのではないかと推論してきました。

なぜならば、それはタイ捨流の布教がこの時期、九州一圏に及んでいたからです。

「生涯不敗」を可能にした宗茂の強さには、戦場における斬り合

いでも、彼が一度も後れをとらなかつたことを物語っています。

丸目蔵人佐の「タイ捨流秘書」には、「摩利支尊天、専ら以て秘術を為す者也」とあり、立花家史料館の宗茂の兜には「月の光」が飾られています。これは摩利支天の表象です。筆者はそこに、宗茂のタイ捨流への思いを感じます。

「戦場に出たなら、無心となりて、捨て身で戦え」と、タイ捨流は教えています。宗茂はそれを実践し



丸目蔵人佐長恵像(熊本県球磨郡錦町)

たのではないのでしょうか。

九州最南端の薩摩でも、示現流の開祖・東郷重位は最初、タイ捨流を学んでいました。

タイ捨流剣術は熊本の地に根づき、「令和」の今日まで、無事に継承されています。現在の宗家は、わが師山北先生の孫にあたる、15代の上原エリ子氏です。

柳川の皆さんも、修行してみられてはいかがでしょうか。(つづく)

■文II 加来耕三